

既往の水稻品種名「弥六」に関する一考察

九州における近世代の稲作技術史（第48報）

嵐

嘉

一

18世紀を中心としてわが国における水稻栽培品種中に「弥六」、「〇〇弥六」という名がかなり多く見出される。この品種名のもの（以後品種と書く）については、すでに安田¹⁾によってその分布や特性の一部が紹介されているが、いまだ充分ではない。著者は後述するように、本種はある種の代名詞的ニュアンスを持ち、むしろ特定の一品種から由来したものではなかろうと考えている。しかし、いずれにしてもこの品種の本体を明らかにすることは当時の稲作事情を知る上できわめて大切であると思われるので、本種の由来などはなお今後の究明に待つこととして、本報では取敢えず資料の紹介をかねつつ、不完全ながら著者の推論的考察を試みることにした。

資料は、暖地分（広島、四国以西）として、第1表に示すような著者の収集した諸文献（本種の記載のない文献もかなりあるが省略）であり、それ以北（東）の地方分としてはほとんど安田氏の「日本農業発達史第2巻第1篇第6章付表」¹⁾および同「加賀藩の稲作・付表」²⁾によった。この安田氏の収集資料は地域別に見るといまだかなりの粗密があり、茨城、北陸および東北地方以外はきわめて不備であるといえる。従って、このことは本報の弥六についても同様にいい得ることで、この地域の分はなお今後の資料収集に待たねばならない部分が多い。

本研究では近畿以北の資料について多くを負っている安田健氏と、昭和46年度の研究委託をされた日本農業研究所に対して深謝の意を表する。

1) 本種の分布状況

記述の年代別に本種の出現する文献と、それにより描かれた地方別の分布状況（国別記録数）を示せば、第1表および第1図のようである。

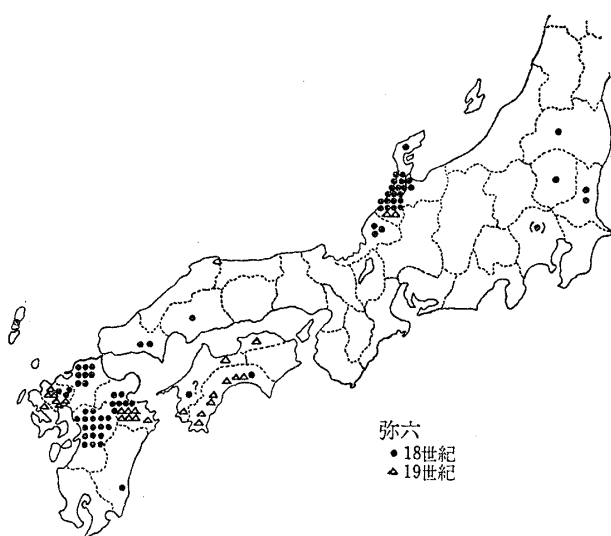
本種の分布は概ね18世紀では九州北半部と北陸西半部とに集中しており、19世紀の文献が主体である四国でも同期にはかなり多い。とくに18世紀では、本種の分布の多い地方は当時の稲作集約地域が主であったといえる。南九州と、新潟県を含めた東北地方ではほとんど現われていない。なお、肥後では「雑事紛冗解」によると、18世紀中ごろでは第2図に示すような分布が見られ、熊本城下を中心として集約的な平野部に集中していることが認められる。北陸地方では本種の主産地は加賀を中心と

第1表 弥六の記載の見られる文献一覧

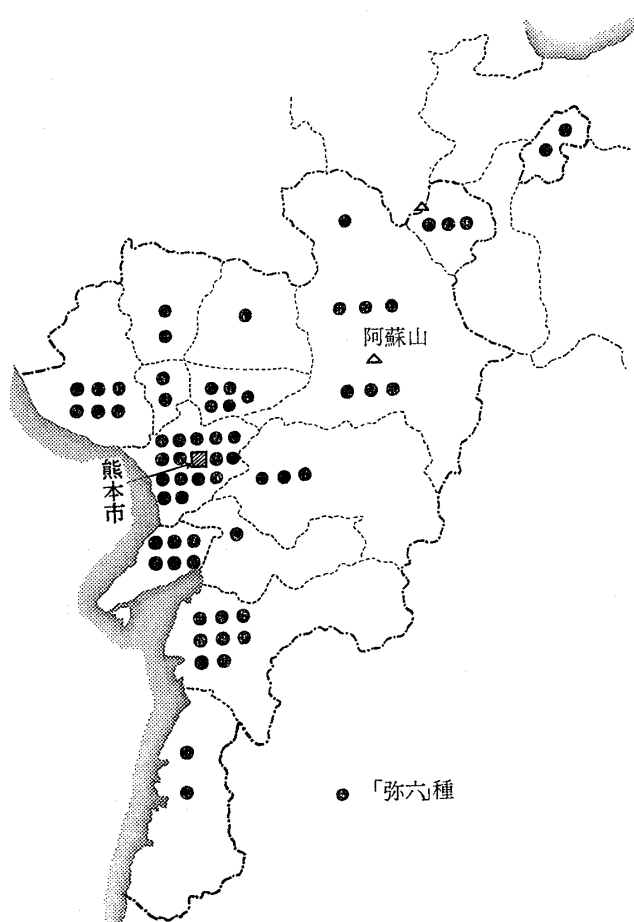
県別	18(17)世紀	
	19世紀～20世紀始	
宮崎	日向纂記 ⁷⁾	(1741～43)
	豊後国産物帳	(1735)
大分	村明細帳 ¹⁰⁾	(1691～)
	村明細帳 ¹⁰⁾	(～1869)
熊本	肥後国産物帳	(1735)
	雑事紛冗解	(1751～63)
長崎	対州産物	(1778)
	長崎県水稻品種調査 ³⁾	(1916)
佐賀	稲作坪刈帳	(1795～1860)
	村明細帳 ¹¹⁾	(1831)
	白石稲作調査	(1831～67)
	在来種特性調査 ⁴⁾	(1911)
福岡	筑前国産物	(1735)
山口	両国本草	(1735～37)
広島	学己集	(1624～43)
愛媛	親民鑑月集	(17世紀)
	伊予米 ⁵⁾	(1919)
高知	地方大要	(1688～1703)
	耕耘録	(1834)
香川	米麦品種改良指針 ⁶⁾	(1925)
	西讃府史	(1858)
福井	越前国産物帳	(1735)
	耕稼春秋	(1707)
石川	加賀国産物志	(1735)
	能州産物帳	(1730代)
富山	越中産物帳	(")
	私家農業談	(1788)
群馬?	樹芸考	(18世紀)
茨城	御領内産物留	(1735～36)
福島	地方名目	(1755)

- (備考) 1. このほか東海～関東の間で弥六1…農譚叢(1722)
2. 対州産物中には佐賀県田代領の記載もある。

し越中の西境部(礪波郡)におよんでいたが、これらの地方は北陸では最も集約的な地方であった。この地方では一方、本種ときわめて密接な関連を持つものと考えられる多収性の「皆済」(カイセイ)一年貢を皆済させる意



第1図 わが国における「弥六」の分布
(備考) この図の熊本県の記載は肥後国産物帳による。愛媛の・?は「野鹿」



第2図 細川藩領における「弥六」種の分布

一の分布も多く²⁾, 両者の関係をさらに考究する必要がある。

2) 本 種 の 特 性

資料が充分ではないが, 18世紀ごろでは暖地では本種の熟期の記載の見られる分を集計すると, 早生18, 中生35, 晩生8となり, それぞれの産地では中生が最も多く,

早生もかなり多い。この中の晩生も現在での熟期区分からすればやや早くなると思う。北陸では中, 晩生種が主体であり, 上記の「皆済」もそうであった。元禄検地のころのものではないかと思われる土佐の「地方大要」中には「ヤロク稲ハ穂之上短キモノナリ, 見込生立閉舗見へ候テモ粗無透閑附モノ故見込ヨリモ合モ有リ……」とあり, 短穂(=短稈穂数型)で稔実よく割合多収のものようであった。北陸でも安田²⁾によると「加州, 能州, 越中産物帳」記載の22種では例外なく無芒であるとし, さらに「福井領産物帳」を加えた51種中では加賀産のものに1種早生があるのみで他はすべて中～晩生であった。さらに, 安田¹⁾の紹介した「地方竹馬集」(18世紀ごろ)一当時の幕府の役人の執務便覧ともいべきものか一の記載では, 本種は中生, 多収, 無芒, 無色の特性を持ち, なお全国の著名品種31種の特性の記述に当ってはこの弥六が基準となって比較されている。こうした点から見ると, 当時この弥六は新しい優良な標準品種であったように思われるのである。なお, 「畊農叢書」の「地方万覧之事」の中では本種は中稲で「白刈ク毛赤シ」とある¹⁾ことから見ると, 当時弥六種と呼ばれた品種は中生ではあったが, 芒の有無, 着色の有無など異なっているものが有ったことがうかがわれる。しかし, 全般的に見て, この品種名のもは中生のなかでの初期の多収系のものであったとする公算が大きい。

次には, 弥六の名で20世紀の前半まで在来種として僅か残った品種の特性調査結果から考察しよう。長崎県では大正4年在来種調査³⁾の中に中稲で中稈少葉と見えており, 佐賀県では明治44年在来種調査⁴⁾では杵島郡産として早稲2種, 小城郡産として中稲1種が見え, 早稲は穂数型と穂重型, 中稲は準穂重型であった。また, 高知県では第2表⁵⁾に示すような調査成績があり, 全般的に見て, 中生が多いが, 早, 晩生もあり, 草型は中間～穂重型が多く, 芒は無か少のものが主体で, 稈先色は無色と着色のものがあつた。粒形も種々であつた。これらの本種の草型は暖地における品種の進化過程から見ると, まだ進化型であるとはいえないが, これらと比較した標準品種がすでにかなりの進化型であった点を念頭に置いて考えねばならない。高知県の南部平野は早稲早植が主体であったが, それに用いられたと思われる早稲の弥六の草型は中間型であった。このように, 20世紀始めに僅かに残存を見たと思われる弥六はその特性の上からはかなり異なった型のものが含まれていたものと考えられ, さらにそれ以前の18世紀の分を含めて考えると熟期, 草型, 芒, 色, 米粒などについてかなりちがったものが存在していたように思われる。このことは, 品種の地方的分化と見るよりも, 始めから種々の別系統の中の優良な

第2表 高知県における「弥六」名品種の特性と主要分布地（大正3年調査）⁶⁾

熟期	草型	品種名	草丈	分蘗	芒	粒	稈先色	品質	その他	類系	主産郡
中生*	中間型	弥六	中	中	無	長		中		坊主系	高知平野
	"	万弥六	"	"	白長	円	白	劣	密粒	島戸系	幡多・高岡
晩生*	最穂重型	西弥六, 弥六撰	高	少	少〜ビ	小円	赤褐	劣	密粒	晩白笹系	
	穂重型	弥六	"	"	無	大	黄灰		心白	山城系	
	"	郡弥六, 次弥六	"	"	"	"	淡褐		"	四国系	
	"	長野弥六	"	"		円		劣	密粒	九州系	幡多の1部
	"	次弥六	"	"	中		赤褐			有芒四国系	"
	"	幡多弥六, 弥六	"	多	少		黄灰	中	香稻	幡多弥六系	高岡

- (備考) 1. 当時の穂数型品種：(早)夜明系(中)千本系(晩)神力系とする。
 2. * この熟期分類と九州・四国での一般分類との関係：中生→早生, 晩生→中生(幡多弥六は晩生)

ものに何らかの代名詞的な共通名を与えたものと考え方が妥当性があるように思われる。

3) 本種に対する考え方

以上の著者の記述は資料の不充分さもあるが、なかにはいくらか推論を加えざるを得ない部分もあるが、この弥六は恐らく18世紀を中心として、主に当時の集約栽培地域に分布した中生を主としそれに一部早生を加えた進歩的な多収性の有力品種群ではなかったかと思われる。

この考え方を支持する第一の理由は上述したような本種の特性上からの適性であろうと思われる。第二には、本種に対する品種の名称から考え得る点である。肥後藩では18世紀中葉に出た「雑事紛冗解」によると、大分県にまたがる細川藩領をも含めて分布した506種中、第2図のように、弥六が63種(内1種は糯)見られ、本種に冠せられた名称によって分類すると、地名を冠したものが32%、人名を冠したもの(選出を含む)が16%で合計50%近くにもなっている。この中、前者についてはそれらの地名との間に何らかの関連のある場合が多いと仮定すると、一応他地方からの移導入種が主であるとも考えられよう。後者についてはその人が導入の仲立をしたか、または新しく選出育成した場合が多いものと見ることもできよう。このように考えると、上例の地名、人名を持った弥六種は新導入種か育成種かである公算が高いことになり、しかもそれらが50%もあるということになると、弥六種自体がその地方での注目すべき新種であったとする場合が多いことにもなる。また、そのほかに、万石、津ノ国、矢ノ根、かばしこ、高崎など当時普及が広く重要であったと考えられる品種に対しわざわざ弥六名を付けている場合が8種もあったが、これなども当時の有力品種に対し箔付けをやったものと考えられぬこともない。

このような理由から、弥六の名はかかる新優良種に対する公認レッテルとなるような場合も少なくなかったのではなかろうか。今でいえば、その地方で奨励されてよ

い優良新品種とでも考えうるようなニュアンスがありそうだ。宮崎県では「日向筆記」⁷⁾によると寛保年間(18世紀中ごろ)に飢肥領内に武蔵国から美味多収の荒川稲を入れ、これを後にわざわざ清武弥六(清武は地名)と改めている。こうした諸点から考えると、弥六の名の品種はその地方での奨励品種の走りのようにも考えられる。

本種はその記録の出現年代から見ると、恐らく18世紀一むしろその前半期に最盛期があったのではないかと考えられ、万石やさらには一本千などよりもその盛期はいくらか、またはかなり早かったのではなかろうかと思われる⁸⁾⁹⁾。このことは弥六種を全体的に見た場合、万石の方が穂数がやや多く、また熟期も中生の晩に偏するものが多かったと思われることから背首されそうである。本種の栽培盛期は恐らく中稲の勃興期に当ており、その中で注目すべき優良種として農民の間でかなり広く公認されようとした初期のものではなかったかと思う。

本種と語呂のよく似たものでは、当時大分県(熊本県の隣接部)にかなり多かった「〇〇やらう」と、長崎県(の隣接部)に神力以前に見られたミロク(弥勤, 美緑, 米緑, 見六)とがあるので、これらと弥六との関連の有無についても一応検討する必要がある。

引用文献

- 1) 安田健: 19世紀における稲作の慣行とその推移, 日本農業発達史 第2巻第1篇, (1954).
- 2) 同上: 加賀藩の稲作, 同上別冊上巻, (1958).
- 3) 長崎県農試: 長崎県水稻品種調査, (1916).
- 4) 佐賀県農試: 佐賀県主要稲品種特性調査, (1915).
- 5) 大日本米穀会 第12回大会愛媛協賛会: 伊予米, (1919).
- 6) 高知県内務部: 米麦品種改良指針, (1925).
- 7) 宮崎県: 宮崎県の早期水稻, (1962).
- 8) 嵐嘉一: 近世代九州稲作技術史 第41報, 日作九支報 第37号, (1972).
- 9) 同上: 同上第42報, 日作九支報 第37号, (1972).
- 10) 同上: 同上第24報, 日作九支報 第34号, (1970).
- 11) 同上: 同上第39報, 日作九支報 第37号, (1972).